

## はじめに

本号は、去る3月24、25の両日、日本学術会議との共催で開催した第3回公開シンポジウム「文明と古典」を特集する。

基調講演として、古典に確認される文明の特質について、石川忠久、服部正明両教授が日本とインドの例をお話下さった。また中国北京大学の裘錫圭教授は、中国における近代古典学の成立と発展および将来の展望を語り、清朝考証学の確たる伝統の上に立つ中国学が、方法論の上でも、資料発掘によっても、大きく変容しようとしている状況をつぶさに報告された。

パネルディスカッション「文明の中の古典の役割」では、主要文明における古典のあり方が報告され、さらにこれを受けての全体討議「古典とは何か」においては興膳宏氏（中国分野責任者）の司会により熱心な討議が展開され、宗教規範、政治目標、社会通念、官吏選抜基準、文章模範、教養養成、情緒涵養などの媒体としての古典の諸側面が言及された。

「原典」班研究報告においては、最古の仏典写本の発見、タミル古典学史、藤原定家日記の意図、イスラーム世界史について興味深い発表があった。なおインド学のI.R. Whicher博士（ケンブリッジ大学）の発表「古典ヨーガの解脱」は、全文をシンポジウム要旨集に掲載したのでそれに譲る<sup>1</sup>。

このシンポジウムを日本学術会議との共催として頂いた戸川芳郎教授（日本学術会議第一部部長）に心からお礼を申し上げる。

毎回新しい視点を提供されている上山春平対談シリーズは、今回は杉山正明氏（モンゴル学）が対談者である。

なお本号は、内山勝利氏（「古典の世界像」班代表）が編集の労をおとり下さった。厚くお礼申し上げます。

10月上旬には、本特定領域研究の中間審査としての文部省ヒアリングがある。研究参加者各位には、現代における新しい古典学構築に向けて、意欲的な成果報告をお願い申し上げます。

平成12年7月7日

領域代表 中谷 英明

---

<sup>1</sup> 要旨集は残部がありますので、関心のある方は事務局までお申し込み下さい。